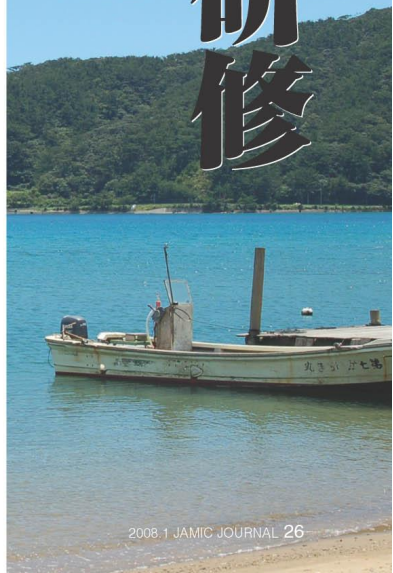


# 離島医療と医師研修

## 奄美大島の医療の歴史

第4回

千葉県立東金病院 古垣 斉拡



### 診療は大島紬工場の一隅から始まった

1953年12月にアメリカ合衆国の占領下にあった奄美群島が日本に復帰した。当時の奄美群島内の病院・診療所を含めた総病床数は138床、医師数は54人であり、群島内の人口約23万人に対してあまりにも少ない状況にあった(54年度、名瀬保健所調査による)。本土復帰直後の島には社会保障制度がなく、島民は「みじめとしかいいようのない生活で、仕事もない、食べるものもない、医者にかかるのは死ぬときだけ」といわれ、発病時には民間療法や祈祷師に頼るのみであった。54年8月に大阪で開催された全日本民主医療機関連合会(以下、民医連)の総会ではそのような現状に対して奄美



「地理的な離島はあっても、人の命に離島があってはならない」

大島・診療所建設を全云一致で決定した。同年12月、東京民医連から医師1人と、看護婦1人が派遣され、奄美大島の中心地・名瀬市内に大島紬(つむぎ)工場の一角を借りて、奄美診療所が開設された。その一角をカーテンで仕切り、診察室・待合室・レントゲン室(東京から持参したポータブル・レントゲン)として診療を開始した。多くの高齢者は大和言葉が通用せず、医師は通訳付の診療を行った。診療所の開設当初の患者数は1日約100人であったが、患者さんが現金を持たないで診療所の現金収入はほとんどなかった。そのため多くの患者さんは、生活保護認定を受けることが早急な課題であった。当時の奄美群島では全世帯数(約4万6000世帯)の10分の1が生活保護世帯であったとい

### 自分たちの診療所をつくりたい

心不全が悪化して肝臓が著明に肥大した患者さん、破傷風の患者さん……。当時診療にあたった医師は「何故これほどまでに放置せざるを得ないのか」と怒りさえ感じる日々であった。このような奮闘のなかで、「もっと進んだ医療を受けられる自分たちの診療所をつくりたい」との機運が住民や診療所スタッフのなかで高まり、診療所は開設から2年後の56年5月に新築移転した。診療所の開設予定地は湿地帯であり、大量の土砂を運び入れる必要があった。そのため地域多くの住民が診療所建設のための資金を50円、100円と出し合い、工事ではザル等をもって参加した。当時の島では最も進んだベッド7床を持つ有床診療所となった。

### 診療所の所長は 卒後2年目だった

奄美診療所が開設されて7年後の61年8月に南大島診療所(大島郡瀬戸内町)が開設された。瀬戸内町では61年以前にも数件の開業医が自由診療を行っていた。貧窮した住民たちは現金を持たないので、死ぬときしか医師に診てもらえない状況にあった。その

### 奄美での死亡原因とその割合

1954年1月-6月 名瀬保健所調査

順位	疾患名	死亡数(人)	割合(%)
1	胃炎、十二指腸炎、大腸炎	141	12.8
2	老衰	126	11.4
3	脳卒中	119	10.8
4	結核	97	8.8
5	肺炎	82	7.4
6	人災	64	5.8
7	心臓炎	42	3.8
8	悪性新生物	41	3.7
9	胃潰瘍、十二指腸潰瘍	35	3.2
10	伝染性及び寄生虫	21	1.9
11	その他	333	30.2
計		1101	

の医師卒後研修カリキュラムが改定され、卒後4〜5年目の青年医師が離島診療所へ勤務できるようになった。

### 奄美でも 本土並みの医療を

当時の奄美では医療設備がないために、助かるのにも助けられない……。島に人工呼吸器がない時代である。気管支喘息の大発作の患者さんに対して、医師をはじめとするスタッフが一晩中交代でアンビニューマックを押しつけて救命したこともあるという。60年代にもって群島内の一般病院は鹿児島県立大島病院(当時48床、現在350床)しかなく、しかもその設備は貧弱なものであった。また県立大島病院の医師は大学からの派遣であり、1〜3ヵ月で交替し、定着する医師はいなかった。69年に奄美診療所に赴任した水吉清勝医師(現奄美医療生活協同組合・理事長)が「本土並みの医療を目指す」と決意し、自ら奄美大島に定住した。77年に医師3人体制となり、コメディカルスタッフも充実して奄美診療所は奄美中央病院(当時33床、現在99床)に発展した。この病院が奄美群島では

人の生命に 離島があってはならない

決して恵まれた医療環境ではないなかで、「地理的な離島はあっても、人の命に離島があってはならない」をスローガンにスタッフおよび地域住民が奮闘して現在の病院・診療所を築き上げてきたのである。

- 【参考文献】
- ① 鹿児島・宮崎民医連 奄美診療所開設50周年記念誌 2003年6月
  - ② いっつも元気 2003年1月

連絡先: nfulugaki@hotmail.com

ために医療機関を設立しようとする住民運動が起こったが、診療所を設立する資金は誰も持たず、金融機関も貸してくれなかった。そこで住民一人ひとりが資金を出し合って、医療生活協同組合という形態で法人を設立し、南大島診療所を開設した。

当初から有床診療所であり、青年医師1人と看護婦2人、事務員2人で診療を開始した。慢性的な医師不足のなか、数年おきに交替で赴任した青年医

師は卒後2〜3年目であり、診療所勤務に十分な研修を受けていなかった。「離島医療に夢とロマン」を合言葉に日々奮闘し、約2年間の診療所勤務を通して、青年医師たちは医師としても人間としても成長した。70年代からは鹿児島・宮崎民医連から定期的に青年医師を派遣できるようになり、84年から診療所は医師2人体制となった(初年度は副所長、次年度は所長として勤務した)。91年に鹿児島・宮崎民医連



### 鹿児島県 奄美大島

